

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

描画テストに関する基礎的研究 3 : ワルテック描画テストについて

著者	田畑 光司
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	8
ページ	99-106
発行年	2008-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000783/



描画テストに関する基礎的研究 3

—— ワルテッグ描画テストについて

Fundamental Study on Drawing Test 3

— The Wartegg-Zeichentest

田 畑 光 司

TABATA, Koji

A fundamental investigation of the Wartegg-Zeichentest was conducted. With 123 university students as subjects, the indices of drawing content, order of execution, and rejection were employed, and a comparative discussion was performed with an earlier study (Shobo, et al 1997). Although some areas revealed similar results from that of the earlier study, all in all, there were few matches. To improve the reliability of the WZT, the test needs further consideration.

はじめに

ワルテッグ描画テスト(Wartegg-Zeichentest: 以下WZTと略記する)は、ドイツ語圏ではよく用いられる絵画完成法検査である。1939年にEhrig Warteggによって考案され、1952年にはKingetによる英語版が出版された。1953年にMaria Rennerが現在のWZTの形を考案したとされる(正保、1996)。4 cm平方の枠に印されている簡単な図形(刺激図形)をヒントに自由に描画をするものである。図1に用紙の見本を示してある。(1)あらかじめ刺激図形が示されているので描画しやすい。(2)8つの描画、その内容、描画順序など多くの情報を得ることができる。(3)遊びの要素があるので検査を意識せず実施できる。などの利点のあることが指摘されている(正保、

1999)。

この検査には、個人の知覚や反応の仕方の相違が、パーソナリティの相違を示すという、全体性心理学学派Sanderの考えが理論的背景にある(渥美ら、1963)。実施は簡便で、枠に刺激図形を参考に自由に描画した後に、何を描画したか(描画内容)、図形番号1から8までのどれから描画していったのか(描画順序)を記入すればよい。個別式・集団式

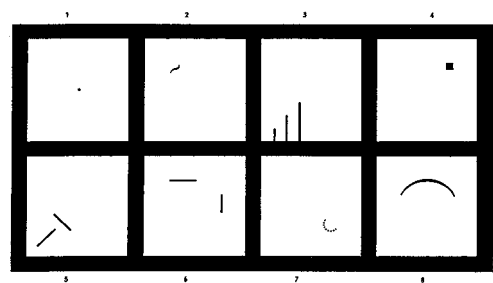


図1 WZT用紙

キーワード：ワルテッグ描画テスト、描画検査
Key words：Wartegg-Zeichentest, Drawing-Test

いずれも実施可能であり、検査時間は20分程度である。

WZTのスコアリング・評価は、Wartegg、Vetter、LossenとSchott、Kingetなどによる方法がある（渥美ら、1963）が、ここでは、本邦で比較的広く用いられている、Kingetによる評価方法（Kinget、1952）についてふれる。

1）刺激図形と描画の関係

八つの刺激図形はそれぞれの刺激特質を持ち、特異的な描画反応を惹起することが期待される。刺激図形をどう理解し、いかに描画に表現できたかを評価する。

2）描画内容

描画が具体的であるか、抽象的であるか、さらには生物や人間、植物、建築物など、ど

のようなものを描画したか。

3）筆圧など

描画線の強弱や陰影、曲線と直線の割合などを評価する。

これらを総合することで、受検態度を始め、情緒的な感性や対人関係、才能などを知ることができるという。

本邦におけるWZTの主な報告を時間軸にそってまとめたものが表1である。

1958年に最初の報告（東ら、1958）以降、紹介（渥美ら、1960）がなされた。1970年以降は基礎的な研究報告（岩淵、1970、1971、1973など）が続き、教育現場で利用できる検査として成書で紹介される（扇田、1986など）までになる。最近では障害児への応用（大徳

表1：本邦におけるWZT研究の流れ

No	発表者	年	小	中	高	大	障	概 要	分 析
1	東ら	1958					200	分裂病型との関連性	Rostの方法
2	渥美	1960					1	有効性の紹介	Kinget (1952)
3	入江	1966					4	分裂病と描画態度の関連	Kinget (1952)
4	岩淵	1970				201		女子スポーツ経験の有無の影響	Kinget (1952)
5	岩淵	1971				315		男子スポーツ経験の有無の影響	Kinget (1952)
6	岩淵	1972				337	40	学生、分裂症と比較	Kinget (1952)
7	岩淵	1973				64		Kinget法の信頼性を検討	Kinget (1952)
8	岩淵	1975		118		210		Kinget法の妥当性を検討	Kinget (1952)
9	扇田ら	1975a				250		YG検査との関連性	Kinget (1952) から提案
10	扇田ら	1975b					3	情緒障害児の特徴について	Kinget (1952) から提案
11	扇田ら	1975c					2	中・軽度精神遅滞児の特徴について	Kinget (1952) から提案
12	正保	1991		118				中学生の特徴について	Kinget (1952)
13	福屋ら	1996						検査の説明・紹介	Renner (1969) の説明
14	正保ら	1997	51	60	78	76		YG検査との関連性	Kinget (1952)、岩淵 (1972) から提案
15	正保	1999	52	61	80	77		健常者反応内容の特徴について	Kinget (1952)、岩淵 (1972) から提案
16	栗村	2000					50	内田クレペリン検査との関連性	東ら (1958)
17	金丸	2005						Kinget法とラルマン法の比較	Kinget (1952) とラルマン (2000)
18	大徳ら	2006	199				17	軽度発達障害児の特徴について	アヴェ＝ラルマン (2000)
19	高柳	2008				20		緑陰環境の影響の評価指標として	アヴェ＝ラルマン (2000)

注) 小) 小学生 中) 中学生

高) 高校生 大) 大学生

障) 発達障害ないしは精神障害

ら、2005) や、環境差の反応指標として応用した報告もある (高柳、2008)。表 1 にあるように、検査対象者の人数も多く、対象も小学生から社会人、発達障害や精神障害者と広範である。実施が容易であり、検査対象者の制限が少ないという、WZTの特徴が反映されている。分析方法は、Kinget にならうものが多いが、オリジナルな方法によるものもある。最近ではラルマンに従うものや、両者の評価方法を比較した研究も報告されるようになっていく。ロールシャッハ法が、図版はヘルマン・ロールシャッハの「インクのしみ」のままだと、クロッパ法やエクスナー法など、比較不能な「五つの別の検査」がある (藤岡、2004) ように、今後、WZTの分析も異なる立場のものが生まれるかもしれない。

50年前に紹介されたWZTは、その後、普及した描画検査になったとはいえない。その理由はいくつかあるだろうが、臨床場面におけるニーズに応えきける力をもった検査ではなかったためであろう。ケースについて有効な情報を提供する検査であれば、必ず現場で普及するはずである。S-HTPでは、クライアントの心的状況が如実に把握できる、という印象があるが、WZTは、境界例や軽度発達障害などに実施した著者自身の経験からいえば、「切れ味のよい」検査とはいえない。臨床事例への解釈に対する情報提供力が不足していることは否めない。解釈理論もまだ不十分である。上述したKingetの評価法においても、解釈の妥当性が十分とはいえず、追跡的な研究報告もみあたらない。扇田ら (1976) の提案する評価方法も同様である。信頼性の高い検査とするためにも、より基礎的な検討を行う必要があるだろう。

投影法としての描画検査は、検査の性格上、

定量的検討は困難である。しかし、S-HTPをはじめ、種々の描画検査では「印象」や「直感」なども大切にしつつ、定量的検討が加えられている。これに対して、WZTの基礎的な検討報告は少ない。簡便で反応を得やすいという利点がありながらも、普及していないWZTの有効性を高めるためには、基礎的な検討を行うことが急務であると考えられる。

今回は描画内容や描画順序などに注目し、先行研究 (正保ら、1997) と同様の分析・評価を行い、結果を比較することとした。

方 法

1 被 験 者：大学生123名 (男子19名、女子104名) であった。

2 検 査 法：WZT用紙、実施条件などは扇田 (1986) にならった。心理検査のひとつとして紹介し、描きたくない、描きにくいものがあれば無理に描画しないでいいことも伝えた。

3 検査時期：2008年5月～7月の期間であった。

4 結果の整理方法：

(1) 描画の拒否

図形番号の全部ないしはいずれかに描画のなかったものを「描画拒否」とした。拒否のあった図形番号と人数を集計した。

(2) 描画順序

記入された描画順序を1から8までの図形番号ごとに整理した。描画拒否は集計から除外した。

(3) 描画カテゴリーと描画テーマ

描画の内容を、記入された描画内容をもとにカテゴリー別に分類した。カテゴリーとテーマは正保ら (1997) の方法に従った。

4つの主カテゴリーは、「生物」、「非生物」、

「事物」、「その他」であった。「生物」はさらに、人間、類人間、動物、昆虫の5下位カテゴリーに、「非生物」は植物、自然の2下位カテゴリーに、「その他」は、文字・記号、概念、模様、分類外の4下位カテゴリーに分類した。描画テーマは図形番号ごとに集計された。

結果と考察

1 描画拒否

刺激図形に対して描画拒否は、27名（22%）であった。図形番号ごとにまとめたものが表2である。拒否の割合は、番号6が最も多く（13.1%）、番号8が最も少なかった（4.1%）。割合についてカイ二乗検定を行ったが、有意差はみられなかった（ $\chi^2(7)=13.289$, $.05 < p < .10$ ）。

表2：描画拒否

図形番号	1	2	3	4	5	6	7	8
割合(%)	5.7	9.8	3.3	10.7	9.8	13.1	11.5	4.1

一例も拒否がなかったという報告（岩淵、1970；正保、1991）と比較すると、被験者の22%に描画拒否があった今回の結果は、高い割合といえる。拒否は検査への非協力や抵抗を示すものと考えれば、被験者の検査への高い抵抗感が示されたことになる。被験者には、「描きにくい場合には空欄でもかまわない」と伝え、強制させなかった。そのため、拒否が多くなったことが考えられる。描画検査は、他の心理検査と比較して受検抵抗の少ない検査ではあるが、やはり被験者の抵抗を配慮する必要があることを指摘する報告（田畑、2007）に加えて、WZTは精神的エネルギーの必要な検査であるといわれている（福屋ら、1996）。本研究に示された結果は、これらの

反映であると考えられる。つまり、実施に際してなお十分な説明と配慮をする必要があったと言えるかもしれない。

図形番号と拒否の関係についての報告は少ない。扇田ら（1976）は、番号6が一番拒否される図形であり、番号5は拒否に出会う率が高い、と述べている。本研究でも同様な傾向が示された。

2 描画順

図形番号の描画順序について、描画拒否のあったものは除外し、93名（男子15名、女子78名）について整理した結果を表3に示した。

表3：描画拒否の出現率(%)

図形番号 記入順	1	2	3	4	5	6	7	8
1	40	8	26	2	3	1	3	16
2	10	25	20	8	4	1	4	28
3	13	12	26	10	17	1	10	12
4	6	19	5	22	13	11	11	13
5	6	20	4	8	24	16	15	10
6	11	5	10	13	15	24	11	12
7	8	8	5	22	14	18	23	4
8	6	3	3	17	10	28	24	5

最初に描かれるものは図形番号1（40%）か3（26%）、2番目に描かれるものは番号2（25%）か8（28%）、3番目は番号3（26%）であり、最後に描かれるものは番号6（28%）か7（24%）であるという傾向があった。番号1から8の並びは、描きやすさの順でもおおむね対応しているものといえよう。

WZTの描画順について、扇田ら（1976）は、番号5、6は拒否が多く、番号1、2は描き易いことをなどを指摘し、順序に反映される特徴をいくつかあげているが、結局は総合的に判断すべしとしている。渥美ら（1963）は描

画順序は二次的な意味を持っているだけとし、Kinget (1952) も、順序に意味があるとしつつも具体性には乏しい。本研究の結果、WZTには描きやすさ、描きにくさがあること、番号順に易から難に並ぶ傾向があったといえる。扇田らの報告との類似もあるが、同一傾向ありと判断するまでにはいたらない。図形の刺激特質を反映しているはずの描きやすさや描きにくさが、描画の内容などにどう影響するか、さらに検討する必要があるだろう。

3 描画カテゴリー

表4と表5に描画カテゴリーと描画テーマの出現率を示した。

これらの結果を、正保ら (1997) の報告にある大学生の結果と比較しながら考察してゆく。

図形番号1 : 「生物」 69.4%、「非生物」 17.4%、「事物」 12.4%であった。「生物」のうち一番多いものは動物であり、テーマ別では多い順に、眼、鼻、花であった。正保ら (1997) の報告では、「生物」 38.2%、「非生物」 23.7%、「事

物」 31.6%であり「生物」と「事物」の出現比率は逆の結果だった。図形番号1は、人間や動物の顔を描く反応が多いという報告と同様な傾向が示されたが、正保ら (1997) の報告とは逆に、人間よりも動物の割合が高かった。描画に際して人間よりも動物の方が抵抗も少なく描画しやすいので、本研究の被験者は、同じ「大学生」でありながらも、幼稚あるいは無邪気な描画を示す傾向があったことが考えられる。大学生のS-HTPを比較検討した報告でも、幼稚さが反映されることがあるという報告があり (田畑、2007)、今回も同じことが言えるかもしれない。

図形番号2 : 「生物」 45%、「非生物」 30.6%、「事物」 14.4%、「その他」 9.9%であった。正保ら (1997) の報告では、「生物」 69.7%、「非生物」 7.9%、「事物」 13.2%、「その他」 9.2%であった。

表5：描画テーマ別出現率 (%)

番号	描画テーマ	(%)	番号	描画テーマ	(%)
1	鼻	65.7	5	食べ物	18.6
	眼	74.5		掃除具	9.8
	花	17.6		武器	13.7
	時計	5.9		金槌	5.9
	天体	2.0		発射するもの	12.7
2	眉	33.3	6	自動車	22.5
	波・水	16.7		複数反応	1.0
	軌跡	6.9		文字・記号	10.8
3	階段	14.7		建物	8.8
	木・茎	9.8	7	何かの跡	20.6
	建物	24.5		花	3.9
	グラフ	3.9		玉・ボール	2.9
	煙突	1.0		眼	26.5
	ジェットコースター	0.0	虫	29.4	
	携帯電話	37.3	自動車	2.0	
	4	窓	7.8	装身具	3.9
眼		52.9	8	天体	14.7
廊下、他		0.0		頭	30.4
図形		3.9		眼	59.8
鉛筆・ペン		0.0		傘	7.8
		ボール		2.0	

表4：描画カテゴリー別出現率 (%)

分類\図形番号		1	2	3	4	5	6	7	8
生物	人間	15.7	33.3	0.8	14.4	3.7	7.5	8.3	16.8
	類人間	14.9	0.9	1.7	28.8	0.0	2.8	4.6	5.9
	動物	38.0	9.0	0.0	9.9	1.9	2.8	19.3	12.6
	昆虫	0.8	1.8	0.0	2.7	2.8	0.9	27.5	0.0
	小計	69.4	45.0	2.5	55.9	8.3	14.0	59.6	35.3
非生物	植物	15.7	3.6	19.3	3.6	1.9	0.9	5.5	3.4
	自然	1.7	27.0	5.0	3.6	0.9	0.9	7.3	13.4
	小計	17.4	30.6	24.4	7.2	2.8	1.9	12.8	16.8
事物		12.4	14.4	38.7	33.3	82.4	73.8	25.7	29.4
その他	文字・記号	0.0	7.2	31.9	0.9	5.6	9.3	0.0	5.0
	概念	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	0.0
	模様	0.8	0.0	1.7	2.7	0.9	0.9	0.9	0.0
	分類外	0.0	1.8	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	13.4
	小計	0.8	9.9	34.5	3.6	6.5	10.3	1.8	18.5

「生物」は少なく「非生物」は多かった。「生物」のうち一番多いものは人間であり、「非生物」では自然であった。テーマ別では眉、波・水の順であった。図形番号2は、生命体を連想させる傾向が強いとされ、本研究の結果もその傾向を示していた。

図形番号3：「生物」2.5%、「非生物」24.4%、「事物」38.7%、「その他」34.5%であった。正保ら（1997）の報告では、「生物」2.6%、「非生物」19.7%、「事物」56.6%、「その他」21.1%であり、同様な傾向があることが示された。「その他」のうち一番多いものは文字・記号であった。「事物」のテーマ別では携帯電波、建物、階段であった。携帯電波（アンテナ）はこれまでの報告にはなかった。時代を反映するものが示されたといえる。図形番号3は、連想的な規定性が高い刺激であるとされ、被験者となった大学生にとって親密度の高い、「携帯電話の電波状態」が選択されたものと思われる。

図形番号4：「生物」55.9%、「非生物」7.2%、「事物」33.3%、「その他」3.6%であった。正保ら（1997）の報告では、「生物」5.3%、「非生物」0%、「事物」75%、「その他」19.6%であり大きく異なる結果だった。「生物」のうち一番多いものは類人間であり、テーマ別では眼が半数以上であった。図形番号4は、眼や窓が多く描画され、年齢の影響の出やすいものという。本研究の結果、同様な傾向があることが示された。しかし、年齢の影響としての大学生らしさを反映する描画内容と思えるものは見当たらなかった。

図形番号5：「生物」8.3%、「非生物」2.8%、「事物」82.4%、「その他」6.5%であった。正保ら（1997）の報告では、「生物」3.9%、「非生物」1.3%、「事物」86.8%、「その他」7.9%であり、同様な傾向があることが示された。テーマ別では、

食べ物、武器、発射するものの順であった。図形番号5は、自由度が低く反応が困難な、いかえれば反応がばらつくものであるが、本研究の結果は「事物」に集中する傾向があったことが示された。

図形番号6：「生物」14%、「非生物」1.9%、「事物」73.8%、「その他」10.3%であった。正保ら（1997）の報告では、「生物」3.9%、「非生物」0%、「事物」76.3%、「その他」19.7%であり、同様な傾向のあることが示された。テーマ別では自動車、文字・記号、建物の順であった。図形番号6は事物が大半をしめ、自動車が多く、反応困難であるという。本研究の結果も同様な傾向が示された。

図形番号7：「生物」59.6%、「非生物」12.8%、「事物」25.7%、「その他」1.8%であった。正保ら（1997）の報告では、「生物」22.4%、「非生物」14.5%、「事物」35.5%、「その他」27.6%であり、「生物」「その他」は大きく異なった結果だった。「生物」のうち一番多いものは昆虫であり、テーマ別では虫、眼、何かの跡の順であった。図形番号7は実体のない「跡」を示す特徴があるとされ、本研究の結果も同様な傾向を示した。

図形番号8：「生物」35.3%、「非生物」16.8%、「事物」29.4%、「その他」18.5%であった。正保ら（1997）の報告では、「生物」40.8%、「非生物」22.4%、「事物」34.2%、「その他」2.6%であり、「その他」以外は同様な傾向を示した。「生物」のうち一番多いものは人間であり、テーマ別では眼、頭、天体の順であった。図形番号8は、球体を連想される規定性があるとされ、本研究の結果も同様な傾向があることが示された。

正保らの報告（1997）と比較して、描画内容のカテゴリーとテーマの結果は、必ずしも

一致した傾向があるとはいえなかった。今後はさらに検討を継続する必要があるだろう。

総合考察

描画法の評価を客観化・定量化することは検査の性格上、難しいものがある。コッホ(1970)のいうごとく直感やイメージなどで把握できるセンスを大切にしなければならない。しかし、客観的評価方法を確立することは検査の信頼性向上のために必要なことである。本研究の動機はそこにあった。WZTは簡便な検査法や遊び的要素のある用紙など、被験者の抵抗感の少ない検査と思われるが、評価・分析においてはまだまだ問題のあることが考えられる。今回は、先行研究(正保ら、1997)に従った分析方法を用いて比較検討を行った。その結果、描画順序や拒否について、図形番号による差異があることが示された。これらは先行研究とおおむね一致する傾向があった。しかし、描画内容のカテゴリーとテーマについては、正保ら(1997)の方法に準じて分析した結果は、必ずしも一致する傾向があるとはいえなかった。たとえば、図形番号と描画内容について、描画カテゴリーとテーマを検討した結果、図形番号1、2は「生物」、3、4、5、6は「事物」、7、8は偏りがないという先行研究に比較して、本研究の結果は、1、2、4、7は「生物」、3、5、6「事物」、8は偏りなしを示していた。このように、一致した知見が得られる場合が少ないことは、WZTの信頼性において大きな問題になると思われる。

ま と め

ワルテッグ描画テストの基礎的検討を行った。対象者は大学生123名で、描画内容、順序、拒否などの指標を元に先行研究と比較検討を行った。その結果、先行研究と同様な傾向を示す結果もみられたが、全体的には一致することが少なかった。この検査の信頼性を向上するためには、さらに検討を行う必要があるだろう。

文献

- 渥美玲子(1960) パーソナリティ研究のための一つの有効な手段としてのワルテッグ描画テスト(WZT)、心理学研究、31、2、121-125.
- 渥美玲子・詫摩武俊(1963) ワルテッグ描画テスト 臨床心理検査法 236-258、医学書院
- 大徳亮平・西村喜文(2006) 描画テストにおける軽度発達障害児の発達の研究～星と波テストとワルテッグ描画テストを用いて～ 西九州大学紀要、36、59-69.
- 藤岡淳子(2004) 包括システムにおけるロールシャッハ臨床—エクスナーの実践的応用 誠信書房
- 福屋武人・松原由江(1996) 描画を技法としてどう使うか— ワルテッグ描画テストを中心に— 臨床描画研究、XI 3-22.
- 東昂・大谷互(1958) 精神分裂病におけるWartegg-Zeichen-Test 精神神経学雑誌、60、3293-294.
- 入江是清(1966) 精神分裂病者の絵画に関する臨床精神医学的研究—自由画、ワルテッグ描画テスト、絵画療法— 東邦医学会雑誌、13、217-235.
- 岩淵忠敬(1970) Wartegg-Zeichen-Testの健康人に対する試験的適用 順天堂大学文理学紀要、13、63-74.
- 岩淵忠敬(1971) Wartegg-Zeichen-Testの健康人に対する試験的適用(Ⅱ) 順天堂大学文理学紀要、

- 14、59-71.
- 岩淵忠敬（1972）Wartegg-Zeichen-Testの健康人に対する試験の適用（Ⅲ）順天堂大学文理学紀要、15、27-36.
- 岩淵忠敬（1973）Wartegg-ZeichenTestの有効性に関する研究Ⅰ 信頼性の検討 順天堂大学文理学紀要、16、33-38.
- 岩淵忠敬（1974）Wartegg-ZeichenTestの有効性に関する研究Ⅱ 描画能力がKinget法による判定に及ぼす影響 順天堂大学文理学紀要、17、31-45.
- 岩淵忠敬（1975）Wartegg-ZeichenTestの有効性に関する研究Ⅲ Kinget法の判定の妥当性の検討 順天堂大学文理学紀要、18、7-15.
- 金丸隆太（2005）ワルテック描画テスト(WZT)の解釈に関する一考察—Kinget法、Ave=Laremant法の比較— 茨城大学教育学部紀要（教育学）、54号、491-507.
- Kinget,G.M. (1952) The Drawing-Completion Test, Grune & Stratton, INC. New York
- Kinget,G.M. (1968) The Drawing Completion Test, The Clinical Application of Projective Drawings, Hammer, E.F. (Ed.) Charles C Thomas Publishers, USA
- コッホ（1970）バウム・テスト—樹木画による人格診断法— 日本文化科学社
- 扇田博元・畠山忠（1975a）描画完成法による人格診断の研究Ⅴ—YG性格検査との相関— 兵庫女子短期大学論集、第8号、23-38、1975
- 扇田博元・畠山忠（1975b）描画完成法による人格診断の研究Ⅵ—情緒障害児の分析— 兵庫女子短期大学論集、第8号、39-53.
- 扇田博元・畠山忠（1975c）描画完成法による人格診断の研究 第7報—中・軽度精神薄弱児の分析— 兵庫女子短期大学論集、第9号、36-48.
- 扇田博元・畠山忠（1976）絵による個性発見 描画完成法 黎明書房
- 扇田博元（1986）絵による児童診断ハンドブック 個性の見方と生かし方 黎明書房
- 正保春彦・ロテム・コーナー（1997）ワルテック描画テストの反応内容の特徴に関する研究 明海大学教養論文集、9、49-61.
- 正保春彦（1991）中学生におけるワルテック描画テストの諸特徴 明海大学教養論文集、3、43-52.
- 正保春彦（1999）谷田部—ギルフォード性格検査からみたワルテック描画テストの反応内容に関する基礎的研究 臨床描画研究、XIV、167-182.
- 田畑光司（2007）描画テストに関する基礎的研究2—大学生の人物画— 埼玉学園大学紀要 人間学部篇、第7号、127-132.
- 高柳和江（2008）都市空間における緑陰の効果—生理的、心理的、身体的分析— 日本補完代替医療学会誌、第5巻、第2号、145-152.
- ウルスラ・アヴェ＝ラルマン（2002）心理相談のためのワルテック描画テスト 川島書店